

修士論文（要旨）

2013年1月

接触場面における日本語学習者と母語話者の会話参加
—相互関係構築の観点から—

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

211J3006

金秋子

目次

第1章	はじめに	1
1-1	研究の背景	1
1-2	研究の目的	2
1-3	本論文の構成	2
第2章	先行研究	3
2-1	接触場面に関する先行研究	3
2-2	対称性と非対称性に関する研究	5
2-3	対人関係構築のためのコミュニケーション	7
2-4	本研究の位置づけ	7
第3章	調査概要	8
3-1	予備調査	8
3-2	本研究の概要	14
第4章	分析方法	16
4-1	文字化の基準	16
4-2	話題	16
4-3	対称性と非対称性／イニシャティブレスポンス分析の概念	17
4-4	アイデンティティ・カテゴリー分析	20
4-5	親しさからみる相互関係の構築	20
4-6	文字化データの表記法	21
第5章	分析と考察	22
5-1	グローバル分析	22
5-1-1	話題展開	22
5-1-2	話題展開時の発話の種類	27
5-1-3	IR分析	33
5-2	ローカル分析	44
5-2-1	アイデンティティ・カテゴリー分析	44
5-2-2	相互関係の構築	54
5-2-3	親しさの表現(丁寧体)	73
5-3	総合的まとめと考察	80
第6章	まとめと今後の課題	81
6-1	まとめ	81
6-2	日本語教育への示唆	82
6-3	今後の課題	82

参考文献

添付資料：本研究の文字化資料

同意書

キーワード【接触場面 非対称性／対称性 話題 アイデンティティ 対人関係の構築】

要旨

本研究を行うきっかけとなったのは、日本語教師としての仕事上の関心と必要性である。稿者は、日本語学習者(以下、学習者)の「日本語の会話が上手になりたい」という声をよく耳にした。いかにして学習者の思いを達成することに貢献できるだろうかと、興味を持ったことが本研究のきっかけである。

本研究では、学習者と母語話者(以下、NS)との接触場面で、相互理解と交流を深めるために、どのようなことばを使って会話をし、二人の関係が構築されていくのかという点に着目した。Fan(1992)は、相手言語接触場面の場合、非母語話者が「言語ゲスト」としてNSに発話形成を助けてもらったり、NSが「言語ホスト」として会話を開始・展開させたりするといった「言語ホスト・ゲスト」の関係が成立するとしている。本研究では、学習者と母語話者との会話参加のやり取りから、言語能力の違いがある二人の関係は「言語ホスト・ゲスト」という非対称関係から変化するのだろうか、変化するなら、変化のきっかけは何かを課題としてそのプロセスを記述し、その変化の要因を探ることを目的とする。本研究の目的は3点である。

(1)学習者と母語話者のやり取りで、非対称関係が変化するプロセスを記述する。(2)学習者とNSのやり取りで、変化の要因を明らかにする。(3)二人の関係が構築するプロセスを記述する。言語能力の違いがある会話参加者が、お互いにどのような行為により関係を構築していくのかその様相を分析し記述することは、日本語教育分野においても有効であると思われる。

本研究で使用したデータは、学習者とNSの1対1のペア4組で、初対面会話から3回に及ぶ各30分間の自由会話を収集し、文字化した資料、および、フォローアップ・インタビューである。調査協力者は20代から30代の女性同士である。学習者の日本語レベルは中上級である。分析方法は、グローバルな視点とローカルな視点から行った。グローバル分析では、各ペアの話題展開の頻度と割合、話題を開始する発話の種類と割合、発話の連鎖に注目するイニシャティブレスポンス分析(以下、IR分析)のコード化システムを用いて量的に分析した。ローカル分析では、個々の発話に着目し、動的かつ相互構築的なプロセスの変化を質的に分析した。何が変化のきっかけになるのかはアイデンティティ・カテゴリーの観点から考察した。

グローバル分析の結果、初対面会話では、いずれのペアにおいてもNS側が半数以上、話題を展開しており、2回目、3回目と回を重ねる毎に学習者側からの話題展開の割合が高くなってきたペアは2ペア(ペアBとC)であった。話題を開始する発話の種類において顕著な特徴が見られたのは、情報要求の割合が高いのはNS側で、情報提供の割合が高いのは学習者側であった。また、IR分析では、ペア毎の会話参加の型から一致度を調べたところ、全回において一致したのは2ペア(ペアBとD)であった。

ローカル分析の結果、4点のことが挙げられる。1点目は、全ペアにおいて、非対称的な「日本人／外国人」カテゴリー化の生成から対称的な関係を形成する相互行為が見られた。2点目は、いずれのペアも、お互い良好な関係を構築したいという傾向にあることが見られた。それは、呼称、言語の表現、言語行動などの表出から相互の関係構築が示され

た。特に、あいづち、発話の重なり、割り込み、笑いなどが多く表出されたペアにおいては親近感の強いことが挙げられる。3点目は、フォローアップ・インタビューでは、両協力者の心的部分を垣間見ることができた。4点目は、総発話数は、相互の関係が構築される指標となることが挙げられる。

総合的考察では、話題展開などの頻度や割合からは非対称的会話参加であるにせよ、人と人との関係からすると、全体として二人の関係は親しい関係へと構築されつつあることが明らかになった。このことから言語能力の優、劣が非対称性を決めるのではなく、人と人とのやり取りの中で相互の関係が決まるのではなかろうかということがいえる。また、接触場面では、NS側の会話参加の反応が学習者側に与える影響が示された。このことからどちらかといえばNS側からの歩み寄りが関係の構築に影響しているものと考えられる。また、総発話数は二人の関係を構築する指標となると考えられる。これらのことは、教室内活動やタスクの設計において、学習者が会話に参加しやすくなる戦略を取りいれる有用性も示唆された。このような結果は、社会的な現場において、学習者と母語話者が出会い、対話する活動を考えていくうえでの基礎研究となるものと思われる。

参考文献

- 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』 15 pp.135-151
- 岩田夏穂 (2007) 「留学生と日本人学生の自由会話に見られる参加の対称性と非対称性」『言語文化と日本語教育』 33号 pp.1-10
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美(1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』 第2号 pp.131-145
- 大場美和子(2012) 『接触場面における三者会話の研究』 ひつじ書房
- 加藤好崇 (2006) 「接触場面における規範の考察」『高見澤孟先生古希記念論文集』pp.48-58
高見澤孟先生古希記念論集編集委員会
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション』 東海大学出版会
- 高民定(2003) 「接触場面におけるカテゴリー化と権力」 宮崎里司、ヘレン・マリOTT共編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』 pp.59-68 明治書院
- 杉原由美 (2010) 『日本語学習のエスノメソドロロジー言語的共生化の過程分析』 勁草書房
- 徳井厚子・榎本智子 (2006) 『対人関係構築のためのコミュニケーション入門 日本語教師のために』 ひつじ書房
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語会話教育』 ひつじ書房
- 中山晶子 (2003) 『親しさのコミュニケーション』 くろしお出版
- 西阪仰 (1995) 「成員カテゴリー」『月刊言語』 Vol24, No.11, pp.104-109 大修館書店
- ネウストプニー, J.V.(1981) 「外国人の日本語の実態—(1) 外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』 45号 pp.30-40
- ネウストプニー, J.V.(1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 春口淳一 (2002) 「三者場面における上級学習者のホスト・ストラテジー—発話調整を中心に—」 村岡英裕編『接触場面における言語管理プロセスについて』 pp.29-39
- ファン, S.K.(2003) 「接触場面のタイポロジーと会話参加者の言語管理」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成 論文集』 2 pp.300-308 国立国語研究所
- ファン, S.K.(2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』 pp.120-141 アルク
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- 三牧陽子 (1999) 「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性—異学年大学生間の会話分析—」『日本語の地平線』 pp.363-376 モリモト印刷
- 三牧陽子 (2008) 「話題の選択と展開に見るポライトネス—ディスコースレベルから捉えた相互行為—」『文学』 第9巻第6号 pp.32-42 岩波書店
- 宮副ウォン裕子(2003) 「多言語職場の同僚たちは何を伝え合ったか—仕事関連外話題における会話上の交渉—」 宮崎里司、ヘレン・マリOTT共編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』 pp.165-184 明治書院
- 好井裕明、山田富秋、西阪仰 (1999) 『会話分析への招待』 世界思想社